

第32号

有機健康 つうしん

遠赤青汁通信 (H27.8.1発行)

桜に託した平和への願いが、国を越えて伝えられていきます。

遠赤青汁株式会社

〒791-0398 愛媛県東温市則之内甲2225-1
TEL フリーダイヤル 0120-148-162
ホームページ <http://www.enseki.com>

さくら功労賞を受賞しました。

桜の保護・育成の功績をたたえる「さくら功労賞」を弊社社長高岡が受賞し、四月十五日に東京で表彰式が行われました。高岡は残念ながら海外出張中でしたので、夫人の高岡令恵が参加させていただきました。

の想いは息子である照海に引き継がれ、平和のシンボルとして世界中に無償で配布、これまでの配布累計は十万本を超えています。

高岡は、亡父正明(故人)とともに、「陽光」桜を開発しました。正明は、国民学校の教師をしていました。「この桜の元に帰って来い」と送り出した生徒たちの多くは戻ってきませんでした。悔恨の想いから、暑いところでも寒いところでも咲く桜「陽光」を開発し、平和への想いと共に亡くなるまで無償で世界中へ送り続けました。正明

東日本大震災の津波により被災した地にも自ら訪れ陽光を植樹するとともに、地元の東温高校生が被災地である福島の高校に友情の桜として陽光を送った際も、発送手続き等をサポートするなど平和への祈りとともに桜の植樹に取り組んでいます。

「さくら」は日本の花。万葉の昔から人々に親しまれ、愛されてきました。その観賞、愛育の歴史は、わが国の文化と歩みをともししています。公益財



受賞者の皆様、さくら議員連盟の皆様、愛媛県の関係者との前夜祭。(左手前から二番目が令恵)



「さくらの女王」と記念撮影する高岡。さくら議員連盟の逢沢一郎議員と昨年、宮城県山元町の植樹でお世話いただいた歌手のこおり健太様も一緒に。



記念すべき50回目の「さくら祭り中央大会」。秋篠宮殿下ご夫妻にもご臨席賜りました。



笑顔で表彰を見守っていただきました。感激です。



陽光の苗木は、高岡正明と妻艶子により、世界へ届けられていきました。(荷造りしている生前の二人)



「元気に咲いてくれよ」1本1本に想いを込めて。

「陽光桜」、ついに映画化

平和への願いを込め、桜の品種「陽光」生み出した故高岡正明(一九〇九〜二〇〇一年)をモデルにした映画が製作されることになりました。

監督は高橋玄氏、主演は笹野高史さん、息子役には的場浩司さん、愛媛県出身の女優宮本真希さんも出演されています。以前より社内でも「映画を撮るなら、お父さん(正明)は笹野さんだよ」と話をしていたので、主演と聞いてビックリしました。本当に雰囲気が出ています。

今年には陽光の開花が遅れたのですが、ロケに合わせたかのように花を咲かせていき関係者を安心させました。三月二十五日から愛媛県内でのロケが開始。東温市内でも地元の方々やエキストラとして参加するなど、撮影も盛り上がりました。

陽光を「東温市生まれの桜」として、撮影中も多くの方々に応援していただきました。地元の方をはじめ、今までにお世話

になった皆様に、さらには映画を通して、正明の想いが届けられればと願うばかりです。

最初に撮影したカットは、桜を作ることは必死になり、家族を顧みない正明に息子が怒りをぶつけるシーンでした。今でこそ亡父の想いを受けて世界へ陽光を届けている高岡ですが、陽光を作り上げるまでに昼夜もなく没頭し、散財を尽くす父。私達では想像が出来ないほどの親子の葛藤があったと思います。

映画「陽光桜 YOKO THE CHERRY BLOSSOM」は東温市・松山市で八月に先行上映し、十一月に全国公開する予定です。二人の想いが詰まった陽光のストーリー。ぜひ、皆様にもご覧いただければ幸いです。



左から高岡照海、故正明、妻令恵。陽光の苗木に囲まれて

農地再生に

挑む

今年も、地元東温高校の生徒さん、作業所の皆さんと合同で「にんにく収穫祭」を行いました。

この日は、午後から雨と言う予報でしたが、晴れ女がたくさんいたのか作業終了までは雨しらず。天候を心配していた担当者をホッとさせました。

東温高校の皆さんは、日頃からもビジネス実習で弊社へ勉強に来ていただいている商業科の方がほとんど。普段の実習では、商品の販売方法や新商品開発が多くデスクワークが中心です。

こうした農場に実際出て、商品となるにんにくがどのように収穫されて、何を基準に選別され、管理されているのか知ることも、販売につながる重要な情報となります。土の感触や、生のにんにくの重さは、売場に出てからでは

「農地再生に挑む」では、放置された農場を再生し、有機圃場として生まれ変わる様子をシリーズとしてお伝えしています。

かりません。体操服も土で汚れてしまいましたが、女子生徒さんも力強くキャリーを運んでくれました。

にんにくは収穫前に葉っぱの部分をカットしておきます。圃場にはマルチと言われる黒い保護シートが土にかかっており、収穫直前にこれを外して、トラクターで土の中からにんにくの玉を掘り起こしていきます。掘り出したにんにくは、その日のうちに拾い集めて倉庫へ運ばれていきます。

収穫直前にマルチを外していますが、にんにくを掘り起こしたまま放置して雨に当たると、余分な水分が周りについて腐りやすくなってしまいます。この日は夕方から雨が落ちてくると予報にも出ていましたので、掘り取りが完了するスピードを見ながら、マルチを外していきます。農場も効率が大事です。全国的に今年は、にんにくが不作と



今年も、おいしいにんにくが取れました。これから根っこをカットして、きれいに乾燥して皆様にお届けします！愛媛県産有機にんにくをよろしくお願いします。

言われています。昨年台風が多くて、長雨が続いたため、日照時間が不足したり、土がいつまでも乾かずにたい肥がうまく働かなかつたりと条件的にも厳しかった様です。弊社の農場も少し小ぶりなものが多かったり、割れていない玉があつたりと例年以上に厳しい様でした。しかし昨年よりも作付面積を広げていたので収量は十分に確保しています。これも工夫ですね。

毎年の様に栽培には苦労していますが、失敗してもまた次につなげることが大事です。今後もおいしい素材をお届けするために、頑張ります。



にんにくは、あらかじめ葉の部分のカットしておき、トラクターを使って一気に掘り出していきます。



作業の手順を高校生に説明してもらいました。キャリー（黄色い箱）に入れる方向や、使えないにんにく等の見分け方を作業所の方々にわかりやすくハッキリと伝えてくれました。



にんにくを拾い集めていきます。「面白い？普段はこういう事はしないよね？」と聞くと「はい。にんにくってこんなになっていると初めて知りました」と答えてくれました。素敵です～♪

ベトナムに帰ります

三年間の農業研修が終了しました。



早いもので、彼女たちが日本に来てからもう三年を迎えます。この夏、農場での研修を終えてベトナムに戻ります。よく頑張りましたね。

最初に二人が来たときは、全くと言っていいほど日本語が話せませんでした。英語もダメと聞いて、その身一つで日本に来た彼女たちの度胸に感心しました。さすがに勇気がいったことでしょう。

その後、テレビや日常の会話の中で日本語を覚え、農作業も先輩の動きを見ながら覚えていきました。漢字の書き取りも頑張っていました。研修生には定期的に農業についての試験が行われますが、最初のうちは日本語がおぼつかないので点数も悪かった様です。

肝心の農作業は、ベトナムの木下からも、「うん、任せて大丈夫」と言うお墨付きをもらうまでになりました。しっかりと学んでくれました。

京都では着物にもチャレンジ。化粧もしてもらって、草履も履いて観光を楽しみました。きれいに化粧していると見違えますね。写真もたくさん撮ってもらって、良い思い出になったと言っていました。寂しくなりますが、これからはベトナムで仕事をしていきます。これからも元気に頑張ってください。ありがとう。



都おどりのポスターとチユンさん。農場にいて日焼けして真っ黒に見えたのですが、色白できれいですね。



桜の木の下で、ズンさん。着物が本当に似合っていました。チユンさんの写真ばかり撮ってあげていました。やさしいね。

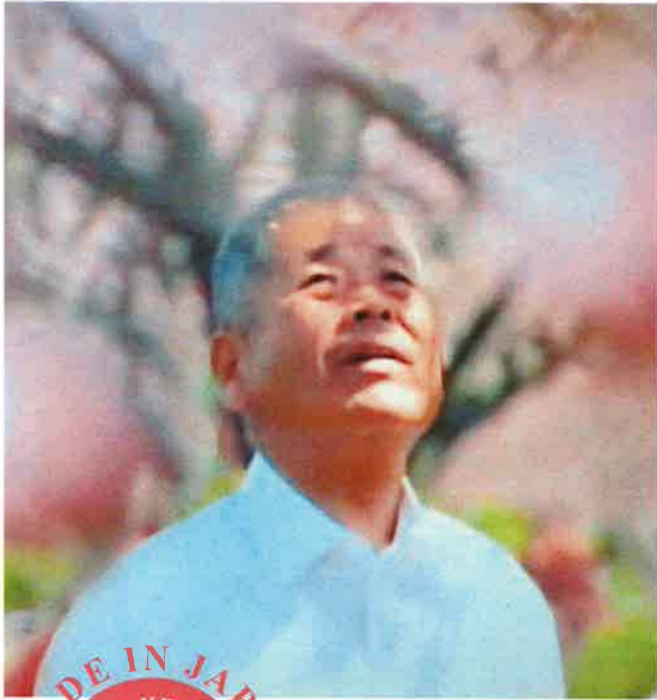


「陽光桜への想い」 化粧水と石けんが生まれました。

陽光桜は弊社にとって特別な桜です。

伯方塩業株式会社を創業した故高岡正明（弊社社長高岡照海の亡父）が戦争で散った教え子への鎮魂と平和の祈りを込めて、二十数年の歳月をかけて交配した桜です。暑い国でも寒い国でも花を咲かせる生命力が強い桜です。（日本の桜の登録第一号）花の色は濃いピンク色をしており、桜の樹皮は医薬品、葉は医薬部外品成分が含まれています。

以前から、石けんをはじめとする化粧品事業を展開してまいりました。伯方の塩を使った「焼塩夢



パッケージには富士山と陽光桜が描かれており、一目で日本を感じるデザインとなっています。遠赤青汁のある愛媛県も記されています。香港そごうをはじめ海外の販売会にも出品し、ご紹介してまいります。

石けん」は多くの方にご愛用いただいています。また、地域資源を活用した化粧品として、いよかん石けん、なまこ石けん、きゅうりの化粧水等があります（OEM製品）。これらの製造経験を活かし、今回ようやく念願であった陽光桜の葉や花の成分を活かした新商品を作りあげることができました。今回、パッケージについても陽光桜を使ったブランド化を進めると共に、親しみのあるデザインを追及しました。そこで、平成二十七年度えひめ中小企業応援ファンド地域密着型ビジネス

ミネラル豊富な海塩配合。透明感のある肌に。



陽光ローションM 150ml

陽光夢石けん 60g

又創出助成事業（ビジネスデザイン枠）に申し込み、県内で活躍するデザイナー山内敏功氏にデザインを依頼、海外での販売も視野に入れ、日本の桜をイメージしてパッケージとロゴを考えていただきました。陽光への熱い想いを高岡が伝え、デザインにも時間をかけましたが、ようやく完成し販売となりました。今回のデザインは、高岡自らイメージを描いて山内氏と意見を交換、「社長は器用ですね」とデザイナーも舌を巻くほどのアイデアを出して、何度も変更を繰り返しました。日本の桜、陽光ブランドの石けんとローション。皆様のお手元にお届けします。



四国八十八箇所 五十四番札所 近見山 宝鐘院 延命寺

(ちかみざん ほうしょういん えんめいじ)

愛媛県今治市阿方甲636



天平年間（729～749）、行基が不動明王を刻んで本尊とし、近見山山頂に建立した寺院が発祥。開創の時、龍王が仏法の興隆に歓喜して大きな宝鐘を掛けたとの伝承があります。もともと寺の名前は円明寺で、53番札所と同じでしたが、明治の郵便制度の発足当時、郵便物の間違いが多く両寺とも困った為、それまで通称だった延命寺を正式な寺名へ変更したのだそうです。

江戸時代に造られた梵鐘の「近見二郎」が音色の良さで有名ですが、現在では老朽化のため、その音色が聞けるのは除夜の鐘のとき。普段は境内にある「近見三郎」の音色を楽しむことができます。

鐘楼のそばには越智孫兵衛の供養塔が立っています。年貢に苦しむ農民を救済した庄屋の孫兵衛。知恵を働かせ、年貢の引き下げに見事成功し、享保の大飢饉のときも餓死者を出さなかったそうです。以来、毎年8月7日には盛大に慰霊祭が行われています。

続報！インドネシア視察。青汁が変える！

弊社では、インドネシアの貧困地域で農業ビジネスを定着させ、現地住民の生活向上に貢献する「BOPビジネス」の展開を進めています。

有機農法での原材料生産から加工、販売を手掛ける6次産業化のノウハウを南スラウェシ州南部に位置するバンタエン県の山間部に導入する構想で、この度現地調査を行いました。今回は、加工の現場を統括する工場長越智も参加しました。越智は有機JASの検査員の資格も持っており、ケール生産者でもあります。現地の農業への取り組みや、今後のケール栽培についての課題など、農家の視点をもって調査します。

調査は四月五日から二十四日



ハサヌディン大学で教授陣との打ち合わせ。

までの約二十日間行われました。着いた初日はハサヌディン大学の有機試験圃場を見学しました。大学側では医学部のプジ教授、農学部のシルビア教授、バンタエン県知事の妹さんのフィーン氏、以前に富山大学で研究をしていたというアミン教授らと現地の農業について教えていただきました。現地での農薬を使わない除草方法を確認し、有機農法が実際に進めていけるのか、どういふところが課題となるのか検討しました。ハサヌディン大学の医学部の皆様には今後も協力していただき、実際に現地の病院で青汁を薬として使っていたり、その臨床データをエビデンスとして活用する計画です。現地で支援を開始するために



現地調査チームで（左から二番目が工場長の越智）。

課題は山積みしていました。まずはインフラです。道路や電力に関しても、まだまだ山間部まで整備が出来ていません。通信環境も非常に脆弱です。今回、日本との連絡のためにインターネットを活用し、メールでのやり取りを行いました。繋がりも切れやすく、大きなデータのやり取りは難しいなど課題が見つかりました。

実際に日本から支援のためインドネシアで頑張っている企業にも見学に行き、インフラ整備についてお聞きしました。自社で整備したそうです。道路や橋が壊れると復旧費用を負担することもあるそうで、政府の対応は想像以上に遅いので、環境整備も時間がかかるなど、貴重な



キャベツ農場を見学にいきました。



根の観察と土壌分析。

体験談を聞かせていただきました。

候補の農場にも行ってきました。標高一六二五メートルの高地での栽培になりますが、玉ねぎやジャガイモ、キャベツの栽培を行っています。キャベツはケールに近い植物です。病害虫の被害状況も参考になりました。土壌については、サンプルを取って分析も行います。土壌が酸性であるかアルカリ性であるかなど、これからの栽培にも重要なポイントです。

候補地ではないのですが、稲作の様子も見せていただきました。現地の農家が、どのように農業をされているのか実際の様子が知りたかったのです。裸足にマスクも無しで農薬を散布されている風景も見ることが出来ました。日常的な様子の確認こそ、現地視察として重要です。

今回の現地調査の期間中にも、何度かバンタエン県の知事、ヌルディン氏にも時間を取っていただき、調査での課題や今後の要望などを聞いていただきました。ヌルディン氏は日本の大学に留学していたので日本語がペラペラ。以前に高岡が陽光桜を植樹したことがきっかけで、交流が続いています。

「BOPビジネス」として実際に着手していけるものか、今後も調査を進めていき、最終的に決定されます。今回の報告書も膨大な量になりました。越智は、現地にノートパソコンを持ち込んで、日々の記録と共に、レポート作りを行っていましたが、印刷すると七〇ページを超えていました。ご苦勞様です。

現地での通訳や移動をコーディネイトしていただいたJAICA（国際協力機構）職員の方々には、大変お世話になりました。今後も皆様のご支援を受けながら、頑張っていきたいと思えます。



調査に関する報告を兼ねてヌルディン知事（左手前）と会食する高岡と越智。